

〔研究報告〕

フレデリック・フランソワ・ショパンをめぐる覚書

相澤 保正¹⁾

要 旨

「別れの曲」「子犬のワルツ」「雨だれの前奏曲」「英雄ポロネーズ」など音楽ファンなら、だれでも一度は聴いたことがあり、それがピアノの詩人といわれるショパンの作曲であることも知っている。ヴェートーベンの「エリーゼのために」やモーツァルトの「トルコ行進曲」と並んでポピュラーなピアノ曲であり、ショパン音楽の愛好者は多い。

筆者は1973年に初代会長遠藤道子によって設立された「日本ショパン協会・北海道支部（札幌）」の事務局を、設立当初から青森県に移る1978年までの6年間担当した。

ショパン協会では、国内外の一流アーティストを札幌に招聘し、レクチャーやコンサートを開催したが、筆者はそのマネジメントを担った。

アーティストたちのホールでの演奏以外に、人対人としてふれあい交わす言葉のなかから、一流芸術家の奥深い精神や哲学にもふれることができ、筆者の若い頃の大きな教訓となった。

このことから学んだこと、ショパンの生涯を幼少期から青年期までとパリで活躍し生涯を終えるまでの18年間のこと、そして第16回ショパン国際ピアノコンクールの聴後感などについて述べ、ショパンの全体像に迫りたい。

キーワード：ピアノの詩人、別れの曲、ショパンコンクール、パリのショパン、ジョルジュ・サンド

I. 緒 言

ポーランドの生んだ偉大な歴史上の人物といえば、コペルニクス、キューリー夫人、パウロ2世らが浮かんでくるが、ショパンの名を挙げない人はいないだろう。この天才音楽家がどのような生い立ちを持ち、どのような葛藤があり、名曲を生み出すのにどんなプロセスがあったのか。また、大物女流作家で恋の遍歴を重ねたジョルジュ・サンドとの愛は、ショパンの芸術家としての人生にどのような影響があったのか。世界の都（みやこ）パリでの熾烈な音楽家同士の競争に、ショパンはどのようにして勝利者になれたのか。あれほどの天分を神から与えられ、つぎつぎと独創的な作品を生み出すショパンは、なぜオペラや交響曲を作曲しなかったのか。

ショパンをめぐる興味は汲めども尽きぬ泉のように湧きあがってくる。

ポーランドはショパンを誇りとして、国家予算を投入し「ショパン国際ピアノコンクール」を5年に一度ワルシャワで開催している。地元ポーランドの人々が、このコンクールの入場券が手に入らなくて苦情が出るほど、世界中の人気を集めている。そしてこのコンクールの優勝者は、間違いなく世界の一流であり第4回のハリーナ・ステファンスカは大の日本びいきで、度々来日し指導や演奏を披露している。第7回のマルタ・アルゲリッチは後日審査員を務めたが、他の審査員と評価の見解が異なることにより席を立ってしまった、というエピソードが残っている。第10回は、ダン・タイ・ソンがアジア人で初めて優勝し、彼が優勝したことによりベトナム人の考え方が変わったといわれている。そして、第11回は19歳のスタニスラフ・ブーニンが優勝したが、彼はソ連には帰国せずそのまま亡命し

1) 弘前医療福祉大学短期大学部（〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1）

てしまった。このようにショパンコンクールは、スケールの大きな数々の話題を残している。

東京オリンピックが開催された1964年以降、日本の経済は右肩上がりの好景気を持続するが、このことをポーランドなどから来日したアーティストとの交流のなかで、筆者はしみじみと実感した。また、日本製のピアノがいまやスタインウェイと並ぶ世界最高級のピアノとなっていることを、ワルシャワでの第16回コンクールで知り、わが国の技術水準の高さを改めて認識したことなども後述する。

Ⅱ. ショパンの幼少期から青年期の家族、故郷、音楽など

ショパンは1810年2月22日、ポーランドのジェラズヴァ・ヴォラ村で、父ニコラ、母エステーナの長男として生まれ、フレデリック＝フランソワと名づけられた。長女のルドヴィカはこのとき3歳だった。この年の秋に一家はワルシャワに移り、ニコラはワルシャワ中学校の教師となり、フランス語とフランス文学を教え始めた。またニコラは、フルートの演奏を趣味とし、これを楽しみにしていた。エステーナはピアノが弾けたので、長女にピアノの手ほどきをした。

フレデリックは物心がついた頃から、主に姉ルドヴィカからピアノの手ほどきを受け、たちまち上達した。

フレデリックは、小柄でかわいい少年だったが、病身でやせていた。しかし、冗談話を考えたり、小話をつくって友達を笑わせ、ときには気持ちが落ち込んでいる友人を励ましたりして、学友からは愛されていた。また、フレデリックは物まねが上手で、上級生たちからも人気があり、子どもの頃から役者の才能もあったようである。

フレデリックが子どもの頃のワルシャワは、音楽のさかんな都（みやこ）だった。あちこちの貴族のサロンなどで、音楽会が開かれていた。

フレデリックの音楽的才能に気づいた両親は、専門家のジヴヌイに指導を託した。ジヴヌイのもとで、フレデリックは難しい技法を覚えると、楽想を五線紙に書きはじめるようになった。



ショパンと両親

ワルシャワでは、ポーランドの歌劇と当時流行だったイタリア歌劇が上演されていたし、ヨーロッパの有名な音楽家たちが、つぎつぎと演奏しにきていた。このように音楽芸術に関心の高いワルシャワの町に突然、フレデリックが新しい星として輝きはじめた。彼が7歳のときの冬に開かれたコンサートでの演奏が、人々の心をとらえ驚嘆させた。

新聞に批評が掲載されたことなどと相まって、たちまちショパン少年の名は、ワルシャワの各層に知られるところとなった。ピアノ演奏が秀逸だということだけでなく、この小さな芸術家はすぐれた作曲もするという評判もたった。

ワルシャワ最大の楽譜店で、『ポロネーズ... 作曲フレデリック・ショパン 7歳』の表題の楽譜を発売したところ、数週間で売り切れたというエピソードも残っている。

このようなわけで、ニコラは自分の息子に誇りを抱き、愛情をそそいだのも当然だった。

ショパン家にときどき歓談に集まった人々のなかに、ニコラの友人でワルシャワ音楽院の院長のユーゼフ・エルスナーがいた。彼はフレデリックの楽譜を見て、おどろくべき少年と讃えた。

フレデリックには、イザベルとエミルカの二人の妹があったが、彼と末むすめのエミルカの体の弱いことが、両親の心配ごとのひとつだった。このため医者への勧めもあって、フレデリックは休暇中、ワルシャワから離れた村で暮らすことになった。村のなかでは老人が、フレデリックの知らない民謡を歌って聞かせたり、農村の歌や踊りについて語ってくれた。この自然豊かな村の田園生活でふれた農民の音楽は、後のフレデリックの楽想の源泉ともなった。

彼がぼんやりとしたスケッチを持っていたマズルカは、この田園生活のなかで完成した。

休暇からワルシャワに戻ってから、エルスナーがショパン家を訪れたとき、フレデリックは新しく作曲したマズル

カを弾いた。

エルスナーはその数年間、ワルシャワ、パリ、ウイーンで書かれたどの曲にも似ていないこのマズルカに耳がつかないやうな感じがしたが、三回弾かせてみて、フレデリックの曲は手直ししない方がよいと判断し、この小さな芸術家をしっかりと抱きしめた。

フレデリックはエルスナーの薦めもあって、16歳のときワルシャワ音楽院に入学した。エルスナーは作曲法、和声、対位法など情熱を込めて教授した。彼はフレデリックが音楽史上にその名を輝かす可能性を感じていた。しかしながら、フレデリックの作品は、これまでの古典的な作曲技法によらず、独創的なものだった為、音楽院の成績評価は普通の合格点をとるだけだった。

フレデリックは19歳のとき、ワルシャワにきてコンサートを開いたヴァイオリンの巨匠パガニーニの演奏を聴き、これまでにない感動を覚えた。この感動はフレデリックがより高みにのぼる芸術家になる為、国を離れて研鑽しようという契機のひとつになったようである。

1830年、フレデリックはウイーンへ行く決意を固め、ワルシャワを去る告別演奏会を開いた。そこではかねて作曲してあった『ピアノ協奏曲第1番ホ短調』を弾き、大好評を博した。1829年～30年にかけてフレデリックは第1番と『ピアノ協奏曲第2番ヘ短調』を作曲した。この2曲の協奏曲が現在のショパンコンクール決勝の課題曲となっていることは、大変感慨深いものがある。

フレデリックと親友のティトウスは、1830年の晩秋ウイーンに向け旅立った。

彼らがウイーンに到着し、活動を開始しようとしたこの時期は、ヨーロッパの政治情勢の雲行きが陰しく、ハプスブルク家支配のウイーンでは、革命の国を祖国とするポーランド人はよく思われてなく、演奏会、とくに宮廷での演奏会の許可は得られそうになかった。

フレデリックは父の勧めもあって、活躍の場が見込めないウイーンを離れ、パリに行く決心をした。

パリは革命に勝利した国の都（みやこ）だったし、その国の民衆はポーランド人たちを、愛と熱狂にあたいする兄弟のように考えていたことも、パリ行きの大きな要因だった。

フレデリックは1831年7月、ウイーンを去ってパリに向かい、9月に到着した。

Ⅲ. ショパンのパリ時代の音楽と人生の終焉

ショパンはウイーンでの短い滞在期間を経て1831年から、パリに住んだ。そこから短い人生の終焉を迎える1849年までの18年間は、ショパンにとって、音楽家としての激動を極める時期となった。

1800年当初54万人のパリは、産業革命の時代に突入し、農村から労働者が大量に流れ込み、40年代には百万人を超える大都市へと変貌を遂げた。

当時のパリでは、貴族階級、新興勢力のブルジョワ中産階級、労働者階級などの階級差が歴然としていて、居住区というものもおおのずと築かれていた。

ショパンが初めてパリに住んだブルヴァール・ボワソニエールは、パリ文化の中心地にあり、国際的な刺激に触れるには格好の地であった。

パリが各分野で活気を呈するなかで音楽界は、イタリアからロッシーニがパリに来ていて、イタリア座の総支配人を務め、その人気は絶大なものだった。また、イタリア人オペラ作曲家ケルビーニは、パリ音楽院の院長を務めていたが、こうした大物音楽家を訪ねながら、ショパンはオペラに魅了され、劇場通いを続けた。

1830年代にパリにやってきたドニゼッティやベッリーニらの魅惑的な旋律（譜例1）は、聴衆を魅了し、あのリズム溢れる美しい旋律を紡ぎ出すショパンでさえも、彼らの旋律に酔いしれた。

この頃、ショパンのワルシャワ時代の恩師エルスナーからは、オペラの作曲家になることを勧められた。パリでオペラの作曲家になることは、19世紀前半の作曲家たちの垂涎的でもあった。

ショパンの心も大きく揺れ動いたと思われるが、エルスナーの助言に従うことなく、ショパンはピアニストであり、同時に作曲家である道を選んだ。

Vaga luna, che inargenti

優雅な月よ

譜例 1

Andante cantabile

CANTO

Vaga lu - na, che i - nar - gen - ti Que - ste

変貌を遂げ続けるパリにおいて、音楽はもはや教会や貴族、宮廷において保護されるものではなく、投機や金儲けの対象となる自由競争へと変容する過程にあった。

このような状況の中で、ピアノ演奏がにわかに脚光を浴びはじめ、人々は華やかな技巧をこらす幾多の演奏家たちを熱烈に歓迎した。

ハンガリーが生んだ神童と喝采を浴びていたリストもパリに来ていて、その華麗な演奏ぶりは、音楽ファンを常に興奮のつぼへと誘い、高い人気を誇っていた。

当時、ヴァイオリンのヴィルトウォーズ、ニコロ・パガニーニが人間技とも思えない、まるで悪魔が乗り移ったような演奏で聴衆を魅了していたことも相まって、リストやショパンはパガニーニの音楽の核心を捉えようと必死の努力を重ねたと推測できる。

ショパンはパリに住んで、カルクブレンナーやパリ音楽院の音楽家たちに認められ、わずか二カ月に公開演奏会を開けるまでになり、そのコンサートにはリストやメンデルスゾーンも来場し、ショパンの演奏を興味深々に聴いている。

ショパンはその独創的な楽想、ピアノ音楽を刷新していく才能など、早くも絶賛され始め、パリデビューは成功だった。

また、ショパンは作曲においては、ポーランドへの強い祖国愛を持ち続け、これを内面の声として音楽に託し、「マズルカ」「エチュード」「ノクターン」「スケルツォ」などの傑作を陸続と生み出していった。そしてショパンのピアノイズムは、しだいに他の作曲家と異なる境地へと向かっていくのだった。

1840年をもってパリの革命の季節は終局を迎え、富を得た中産階級は、次に文化を身につけようとする。その一つが音楽への憧れであり、貴族と同席できるオペラ座やコンセルバトワール音楽協会の会員になることを望んだ。以前ならかなわなかった公爵や伯爵と同席できることは、新興階級の人々にとって、ことのほか大きな意味を持っていた。

新興のサロンにはグランドピアノが置かれ、ピアニストは大いに歓迎され、もてはやされた。また、ピアニストはこの新興サロンに招かれることが一流の証ともなっていき、ショパンの名声は最上級のブルジョワ層にも伝播されていった。

ショパンはこのようにサロンの人気者になっていったがそれは、ショパンのピアノイズムと相まって、幼児童期からのユーモラスな表出にも散見されるように、天性人の心を掌握する巧みな術をそなえていたことによるものだった。

ショパンは名声を得ることで、伯爵令嬢らのレッスン希望者も増え、レッスン料は20フラン、出張レッスン料は30フランに送迎馬車つき、といった高額の指導料を得ることで、経済的にも豊かになった時期であった。当時、オペラ座の最高座席料が13フラン、労働者が15時間働いて3フランくらいだったことから推測しても、ショパンが受け取るレッスン料は破格だったことがうかがえる。

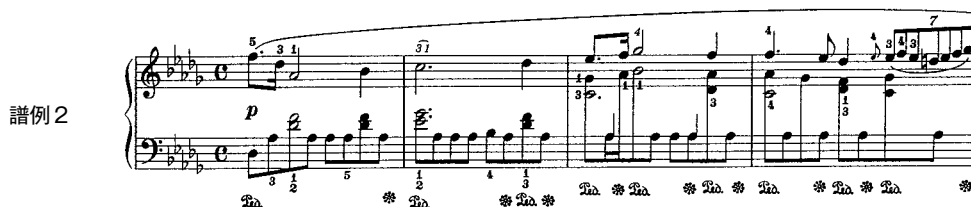
ショパンについて語るとき、ジョルジュ・サンドという大物女流作家との関係抜きには通過できない。

サンドは百冊を超える本を書き、男装し、葉巻を吸い、次々と恋の遍歴を重ね、ショパンとの恋愛があり、ドラマチックな人生を送った女性だった。そして彼女は、芸術の使命は社会の人々のためにある、とショパンに訴えた活動家でもあった。身長156cm、小さな手足、声は枯れていて表情は変化に乏しく、物事を静観するタイプ...しかし、だれもがサンドに感嘆するのは、そのピロードのような黒いひとみだった。

ショパンにとってサンドとの恋愛は、パリで生き残る道へとつながっていったことは確かなようである。

1838年ショパンとサンドは、一時パリを離れてスペインのマヨルカ島に行く。しかしこの島での暮らしは快適ではなく、ショパンは健康を悪化させ翌39年6月にはフランスに戻り、ノアンにたどり着いた。そしてパリに戻るようになるのだが、この時期にショパンの重要な作品である「プレリュード集」と変口短調のソナタ第2番を創作した。吐血して健康状態が芳しくなかったこの時期に、このような名作を生み出したことに驚嘆させられる。

ショパンの作品に内包されている古典性と前衛性とは、彼がバッハやモーツァルトを尊敬していたことから容易に推測できる。プレリュード集は、ショパン作品中でも前衛的なエクリチュールにあふれている。そしてプレリュード（譜例2・雨だれ）から、より精緻なソナタへと進んでいった。



ショパンは1841年から46年まで（サンドとの別離の日まで）、初夏から秋まではノアンで作曲に専念し、秋から春はパリでレッスンする生活を送った。この時期（1841～46年）、ショパンはソナタ第3番短調、英雄ポロネーズなど、ヴィルトウォーズの深みを反映した大作を生み出している。

サンドの二人の子どものことから、愛情にひびが入り、ショパンとサンドは別れることになるが、この生活が崩れた後のショパンには、もはや新しい作品を生み出す力は残っていなかった。

ショパンは晩年、音楽についての考えやピアノメソードについて書こうとしていたようで、その草稿がわずかに残っているが、全容を解明出来ないことは残念である。

18年間、音楽家としての芸術を育んだ国際都市パリで、祖国ポーランドの偉大さを、音楽を通して訴え続けたショパンは、1849年10月17日、ヴァンドーム広場に面したアパートマンで永遠の眠りについた。

IV. 日本ショパン協会北海道支部設立への参画と国内外アーティストからの学び

日本ショパン協会は、ショパン生誕150年を記念して1960年に創立され、初代会長は高折宮次が務め、東京に事務局を置いた。会の目的は、ショパン芸術の理解と宣揚の助長、日本とポーランド両国の音楽文化の交流と相互協力の助成、ショパン国際コンクールへの協力などを掲げ、今日まで活発に活動を展開している。1973年には日本最初の支部として、日本ショパン協会北海道支部が初代会長遠藤道子によって設立され、札幌に事務局を置いた。筆者はこの北海道支部設立に参画し、事務局のキャップを1973年から、青森県に移る1978年までの6年間勤めた。本務の傍らショパン協会のマネジメントを担当したので多忙を極めたが、国内外の一流アーティストらとのふれあいのなかから、生涯の音楽的糧となる教示を数限りなく享受した。

コンサートやレクチャーで招聘したアーティストは、外国からヤン・エキエル、レギナ・スメンジャンカ、モレイラ・リマ、国内から野村光一、遠山一行、園部三郎、永井進、田村宏、井口秋子、水谷達夫らだった。

1975年9月、札幌で「ヤン・エキエル コンサート・レクチャー」を開催した。

ヤン・エキエルはショパンコンクールの審査員で、ワルシャワ音楽院の教授だった。

「コンサート・レクチャー」が終わって一息ついた後、おみやげの希望を尋ねたところ、彼は『ワンタッチのアンプレラがほしい』と言ってくれた。早速、デパートでステッキ状の高級なアンプレラを調達し、彼にプレゼントした。

翌日、札幌の市内観光を約束していたので、待ち合わせ場所の道庁前で落ち合ったところ、小春日和の好天にも拘わらず、昨日のプレゼントをニコニコして持参していた。これがジェントルマンのマナーなのだと思ったが、うれしさが率直に笑顔に出ていて、筆者もうれしかった。

翌76年9月、同じく札幌で、モレイラ・リマのコンサートを開催した。彼はブラジル出身で、第7回ショパンコンクール（1965年開催）第2位だったが、高い評価を得ていた。第7回は、あのアルゼンチンのマルタ・アルゲリッチが圧倒的な人気で優勝をさらった年であり、南米に光があたった年でもあった。コンサート終了後、おみやげの希望を尋ねたところ、彼は『ソニーのラジカセがほしい』と言ってくれた。

筆者はこの世界的なアーティストたちの希望から、日本の経済力、物の豊かさ、品質のよさなどは、世界のトップレベルにあることを、日本に居ながら感じとれた。

国内のアーティストで印象に残っているのは、田村宏だ。東京芸大教授であったが演奏会の出演にも積極的で、札幌でのリサイタルは入場券が売り切れ、演奏者の了承を得てステージ上にも椅子をならべて入場者を入れた。田村宏の色紙の言葉は〈ピアノを歌わせるように〉だった。

丁度この頃、田村宏の〈チェルニー40番練習曲〉のレコードが発売され、ピアノ学習者たちはこぞって購入した。1970年代はこれらの企画がヒットした時代だった。3日間の札幌滞在のなかで筆者は、田村宏に〈チェルニー40番〉録音についていろいろ尋ねた。印象に残ったことは、田村宏はこの録音のため、2年間一切の公開演奏会を休んだ、ということだった。一般的に、ピアノの学習が進めば〈チェルニー40番〉はだれもが弾くのだが、完璧な演奏となると一流の演奏家でも必死な取り組みになることを改めて認識し、芸術の深遠さをしみじみ感じた。このようなこともあって、田村宏の胸のすくような〈チェルニー40番〉のレコードは、筆者の宝物である。

水谷達夫が学生のレッスンをする場に立ち会ったときのことである。学生たちはヴェートーベンのピアノソナタを受講曲として持って来ていたが、何番のソナタでも、どの楽章でも範奏しながら、この内声はオーボエなどと分かりやすく指導していたことが印象に残っている。

ヴェートーベンのピアノソナタ32曲をすべて弾けるという勉強量の底しれない深さに、感嘆した。

ある年の秋、音楽評論家の野村光一を千歳空港から札幌まで送迎した車中で、窓からの景観を眺め「ああ、この風景はヨーロッパと似ているね」とつぶやいて、第6回ショパンコンクール優勝者マウリツィオ・ポリーニの演奏会を東京で聴いた直後だったようで、「あんなきれいな音は聴いたことがない…」と心から語ってくれた。ポリーニが優勝したときの審査員だったピアノ界の巨匠アルトゥール・ルービンシュタインは、審査員席をみわたして、「ポリーニは、ここにいるだれよりもうまい」とのジョークも混ぜた賛辞をおくった映像が残っている。

ショパン協会のマネジメントを通じて、一流とはこういうことかと、数えきれないほどの示唆を享受し覚醒させられたことを、いまもって深く感謝している。

V. 第16回ショパン国際ピアノコンクールを聴いて

第16回ショパン国際ピアノコンクールは、ショパン生誕200年を記念して、2010年9月30日から10月23日までワルシャワで開催された。コンクール参加者は予選を通過した81人で、日本からは17人の参加があり、国別では最多であった。筆者はファイナル前の第3次予選（20人）を聴いたが、世界各国のきらきりと輝きを放ち、才能に溢れた若手ピアニストたちのヴィルトウォーヅの世界に浸り、3日間感動の連続だった。審査員には、マルタ・アルゲリッチ（第16回から復帰）、ダン・タイ・ソン、フィリップ・アントルモンら世界のピアニストとして円熟の境地にある12人の豪華な顔ぶれで、日本からは岩手県出身の小山実稚恵が審査に加わっていた。

3次予選に進んだピアニストたちは、音の美しさ、音楽の構成力、独創的な表現力、選曲した自由曲など、それぞれ

れ説得力のある質の高い演奏で、至福の時を享受した。

印象に残ったピアニストにふれてみる。

ユリアーナ・アウデーエワ（ロシア 1985年生まれ）はジョルジュ・サンドをイメージしたというコスチュームで登場し、遠い異国から甘いロマンを語りかけてくるようなほのかな弱音から、豊穣に響く強音までをクールに駆使して見事なショパンを聴かせてくれた。自由曲で弾いたノクターンに安らぎを感じた。

フランソワ・デュモン（フランス 1985年生まれ）はピアノを熱情的に弾きまくるというタイプではなく、フランス人らしい優雅な感性が随所に現れ、大人の音楽を感じた。

エフゲニ・ボジャノフ（ブルガリア 1984年生まれ）は他のコンクールでも受賞歴があるように自信に満ちた演奏ぶり、ショパンを音量豊かに表現していた。演奏終了後の大きな拍手やスタンディングコールは既にスター的存在感を示していた。

ダニール・トリフォノフ（ロシア 1991年生まれ）は、琴槌（ハンマー）でかすかに弦をまさぐりながら、限りなくやわらかなソノリティーを醸し出す、かと思うと雷鳴のようなサウンドで聴衆に迫ってくるショパンで、19歳を感じさせない風格ある演奏だった。

インゴルフ・ヴンダー（オーストリア 1985年生まれ）は感情移入過多にならず、全体的には骨太の演奏だった。

字数の関係もあり、すべてのピアニストにはふれられないが、ファイナルに進んだ10人が協奏曲を競演し、アウデーエワが優勝した。女性ピアニストの優勝は、アルゲリッチ以来45年ぶりだった。

同コンクーで使用されたピアノは、スタインウェイ、ヤマハ、カワイ、ファツィオリの4種で、日本製のピアノの品質の高さに誇りを感じた。

尚、このVの項の執筆については、筆者が「第16回ショパン国際ピアノコンクールを聴いて」と題して、〈陸奥新報〉に2010年11月5日から11月13日まで、3回にわたって連載した内容と、一部重なる記述のあることをお断りしておく。

VI. まとめ

シューマンはショパンが十代のころ書いた「ラ・チ・ダレーム・ラマーンによる変奏曲」について、「諸君、天才だ！帽子をとりたまえ」と絶賛したが、そのシューマンはショパンと同じ1810年生まれ、リストは1811年生まれである。神様はまるでこの同時期に、ヨーロッパ各国に天才を一人ずつ出現させたかのようなのである。

ショパンの遺言により、姉ルドヴィカの手により心臓はワルシャワに持ち帰られ、聖十字架教会の柱の中に納められていて、現在もそこを訪れる音楽愛好者は絶えることがない。

ショパンの幼児童期に音楽を教えたジヴヌイは、煙草を切らすことのできないヘビースモーカーだったが、ショパンはこの先生が大好きだった。彼はショパンにバッハやモーツァルトを熱心に教えた。筆者はこの多感な時期に、ショパンの琴線にふれるバッハやモーツァルトがこの天才少年の生涯の審美眼を形成したように思う。サンドとマヨルカ島に行ったときに持参した楽譜はバッハだけだったという。



審査員席より見たコンクール会場
(©Yasumasa Aizawa)



聖十字架教会の柱
(©Yasumasa Aizawa)

またエルスナーの指導も、ショパンの型破りな独創性を無理に手直しせず、そのまま伸ばしてやったことが大きな、大きな未来へと翼を広げることになった。本人の天分と周りの環境が相まって生まれた珠玉のようなショパンの名曲は、永遠に人類の文化遺産である。

(受理日 2012年10月31日)

参考文献

プロシュキエヴィチ作 吉上昭三訳 祖国マズルカ 学習研究社 1969年
名曲解説全集 15 音楽之友社 1981年
ワルシャワの覇者 学習研究社 2001年
小林裕子著 フレデリック・ショパン全仕事 アルテスパブリッシング 2010年
陸奥新報「第16回ショパン国際ピアノコンクールを聴いて1」2010年11月5日
陸奥新報「第16回ショパン国際ピアノコンクールを聴いて2」2010年11月11日